

---

# 妄想アワー

のりまき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
妄想アワー

【Nコード】  
N0156J

【作者名】  
のりまき

【あらすじ】  
大学で恋をした、女性の話。

自分の腑甲斐無さに奈美は苛立った。

恥ずかしいと思う節もあったけど、学級委員に進んで立候補していた小学生時代とは打って変わり、中学生からは密かに影を歩んでいた。自意識過剰だと言われればそれまでであるが、駅の改札口を大人として通る辺りから奈美には自覚が生じていた。次第に、行動が消極的になっていったことに気づくのが遅かったらしい。気づいたらもう、大学生だった。

自分が消極的だと感じたのは、中学三年生の終わり頃。高校生になれば、きっと小学生の時のように勇猛果敢に進んで行けるのだと勘違いしていた。そんな淡い望みなど、ただ望んでいるだけでは叶わないことを、高校生になって数ヶ月して初めて思い知った。

知っておきながら、奈美は再びその思いと共に大学生活へと飛び込んだ。高校時代とは違う、ましてや中学生時代なんかとは比べ物にならないほどの自由で解放的な空間が広がっていた。迷わなかった。彷徨うことを知らない旅人のように、奈美は堂々としている自分を感じた。ここならば、と頷いていけるはずだった。

キャンパスの中心を通る並木の下に机を出し、部活動の勧誘が賑わいを見せる。押し合い圧し合いというほどでもないが、ところどころで新人生の奪い合いも見えた。

中学、高校と奈美を支えてきたのは部活だった。自分の行動に自信を持てない奈美も部活動への参加だけは意地を通してでも怠るわけにはいかない、と思っていた。

部活動といってもほとんどサークルに近いということを、奈美は大学を選択する時点で承知していた。大きな大会があるわけではなく、限られた大学間での交流試合が春と秋にあるだけで、さらにそれもほとんどお遊びのような感じであった。

男子と混合の部活ではあるが、人数は大して多くなかった。週二日の練習で活気があるとはお世辞にも言えない。それでも、奈美は部活動のある日は率先して参加していた。半ばお遊びでも、バレーボールの楽しさは中学生のときに学んだ。特に、この部活動をもっと活発にしようなどとは思っていない。奈美が変えたいのは部活ではなく、自分だった。

大学生活を送って数ヶ月が経ち、すぐに夏休みへと入った。夏休みの初めには、部活の主将交代のための旅行があった。

海の香りが漂ってくるような旅館に泊まり、夜はバーベキュー、昼は海水浴と、三泊四日ほど楽しんだ。奈美が一つ上の先輩である慶太に焦がれるようになったのは、その主将交代の旅行のときだった。

「夏休みの課題って、何が出たの？」

チューハイの缶を片手に、慶太は唐突に話しかけてきた。自分もお酒が入っているためか、ほのかなグレープフルーツの香りが心地いい。

一つ一つ指折り数えながら答える奈美に、慶太は一々頷いていた。少し色の濃い肌にはら色が浮かんでいる。それだというのに、彼はまだ喉仏を揺らす。

こんな風に話せたのはいつ以来だろう。奈美は慶太のまっすぐな瞳に囚われていた。

別に隠そうと思っていたわけではなかった。嘘など微塵も吐く気は無い。

そうは思っただけでも、気づけば奈美は二年生になっていた。脳内ではあれこれと進展しているはずなのに、慶太との関係は、未だに先輩と後輩の間柄のままだった。

結局、高校生の時と変わらない。望んでいるだけで、何も変わりはないのだ。

一緒に部活ということに安心してちゃだめだ、と誰かが言ってくればどんなに楽だろうか。でも、そんな人はいない。口外してないのに、そんな人が現れるわけが無い。

放課後になり、奈美は一足先にボールを壁に叩きつけていた。視界に何度もボールが入ってくるが、視線は床に記される白い線を捉えていた。

こうしていると、勝手に脳内で映像が流れてくる。悪い映像じゃない。心地よい映像。だけど、非現実的。

不意に体育館の扉が開け放たれ、逆光と共にスラリと伸びた輪郭が現れる。どこことなく地の見える声が響き渡った。

「奈美！」

早瀬、といつもなら苗字で呼んできていたはずなのに、慶太は自分のことを下の名前で呼んでくれる。それに答えると、いつも慶太は近寄っていてくれた。

ボールを手に取り、体育館に響き渡る連続音を止めた。

そんなこと、あり得るはずないよ。自分が可笑しくなって、密かに笑うようになったのはここ最近のことだ。

三年生になると通うキャンパスが変わってしまう。そんなことはこの大学に通う者なら常識である、単位を落としさえしなければ。三年生以降に通うキャンパスの敷地は狭く、高々とした校舎が建っていて都会的だった。それに比べで、一、二年生の通うキャンパスはただっ広い印象を受ける。そして、グラウンドと体育館が設立されているのも、こっちのキャンパスであった。

そのこともあり、慶太が体育館に顔を出すのは、部活が始まって三分位してからだった。

奈美は時計を見上げた。もうそろそろ誰か来る頃かな。

「一番だと思ったのに。早いんだな、早瀬って」

先輩だといいな、と思った矢先に、台詞は違うけど聞き覚えのある声が体育館に響いた。ざわりと騒ぎ出す自分の胸中を、うまく抑えられない。自分があんな想像をしてしまったばかりに、どうしよう、とばかり考えてしまう。

「珍しすぎて、驚いてんな」

目を細める慶太に、奈美はほんのりとろけそうになる。体が熱い。

赤く染まる夕日が体育館の窓を越して、二人の間を埋めようとしている。二人だけの空間にしてはあまりにも広すぎた。コートに印されたいくつもの線が交差し、奈美と慶太を繋ぐ。

鼓動と吐息が少しずつ空間に広がっていく。

何も言えない彼女のところへ、慶太は線を辿ることなくまっすぐに歩み寄った。

「どうしたんだよ、早瀬？」

目の前まで来て、じっと見つめてくる慶太に、鼓動が加速していく。

切れ長の目だったり、細くへの字を描く眉だったり、整った歯だったり。その大きな手も、弾力性のありそうな胸板も、スラリとバネのある長い脚も、好きなところならどんどん思いつくのに、今は慶太の顔を見るだけで精一杯だった。

慶太が目の前で手を振ったり、額に手を当てて熱を測ってみたりしたことも、今の奈美には何も感じ取れなかった。ただ、残像として笑う姿だけが目に浮かんでいる。

「そろそろ、ネット張ろうか」

慶太はすでに倉庫の方へと向かっていた。

視線を注いだその背中があまりにも大きくて、どこか暖かく感じてきた。

「奈美って」

想像通りにはいかない。高校生でそんなことは十分に承知していた。だから、せめて、と思った。

「奈美って……下の名前で、呼んでください」

自分の腑甲斐無さに苛立った。

声が出たのかもわからない。想像の中では積極的なのに、どうして、こんなに消極的なんだろう。

振り返る慶太の微笑が奈美を包み込んでくれた。

「じゃあ、ネット張ろうか、早瀬」

赤い太陽は、いつの間にかその光を体育館に入れないようにしていた。

【完】



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0156j/>

---

妄想アワー

2010年10月14日17時15分発行